



2020年 第36回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第36回 写真の町東川賞受賞作家

<海外作家賞> 対象国：ロシア

グレゴリ・マイオフィス氏 (Gregori MAIOFIS)

受賞理由：写真集『Proverbs』(Nazraeli Press, 2014)、「Mixed Reality」シリーズ (2018-) 及び一連の作品に対して

<国内作家賞>

ながしまゆりえ

長島 有里枝氏 (NAGASHIMA Yurie)

受賞理由：展覧会「長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」(東京都写真美術館、2017年)、「作家で、母で つくる育てる 長島有里枝」(ちひろ美術館、2018-19年)、「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2019年) ほか、一連の作品に対して

<新人作家賞>

うえはらさやか

上原 沙也加氏 (UEHARA Sayaka)

受賞理由：展覧会「The Others」(キヤノンオープンギャラリー1、INTERFACE - Shomei Tomatsu Lab.、2019年) に対して

<特別作家賞>

たかはしけんたろう

高橋 健太郎氏 (TAKAHASHI Kentaro)

受賞理由：写真展「赤い帽子」(ニコンサロン銀座、大阪、2019年) に対して

<飛弾野数右衛門賞>

きかいひろお

鬼海 弘雄氏 (KIKAI Hiroh)

受賞理由：『PERSONA 最終章』(筑摩書房、2019年)、『PERSONA』(草思社、2003年)、『東京夢譚—labyrinthos』(草思社、2007年)、『東京迷路』(小学館、1999年) ほか、東京を撮り続けてきた作品に対して

第35回 写真の町東川賞審査会委員 (敬称略/五十音順)

安	珠	(あんじゅ)	写真家
上野	修	(うえの おさむ)	写真評論家
北野	謙	(きたの けん)	写真家
倉石	信乃	(くらいし しの)	詩人、写真批評
柴崎	友香	(しばさき ともか)	小説家
丹羽	晴美	(にわ はるみ)	学芸員、写真論
原	耕一	(はら こういち)	デザイナー
光田	由里	(みつだ ゆり)	美術評論家

第36回 写真の町東川賞審査講評

第36回写真の町東川賞審査会は、2020年2月13日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞57名、新人作家賞66名、特別作家賞28名、飛弾野数右衛門賞28名、海外作家賞26名。例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧、検討し、午後から合計181名の作家より、5つの賞を選ぶ審査に入った。今年は審査委員1名が欠席したが、事前に推挙した候補者を審査に反映させていったので、事実上8名全員での審査となったとあっていいだろう。

昨年に続き、今年も国内作家賞は最終段階で票がきれいに割れた。議論と投票を繰り返した結果、膠着状態から選ばれたのが、長島有里枝氏である。2017年から2019年にかけて開催された、東京都写真美術館での「そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」、ちひろ美術館での「作家で、母で、つくる育てる 長島有里枝」、横浜市民ギャラリーあざみ野での「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」の3つの大規模展における、従来の社会、表現、家族や、その関係性などをラディカルに問いかける独自の表現の探究と創造性は比類がなく、また、「発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象」とする国内作家賞の規定にぴったりと合致するものである。

毎年、激戦となっている新人作家賞は、最終段階で上原沙也加、山元彩香の両氏の一騎打ちとなり、僅差で上原氏に決定した。一見きわめてオーソドックスだが、これまでの沖縄の写真へのリスペクトとアップデートを孕んだ、日常的な風景のスナップショットが高く評価された。対象となった展覧会「The Others」は、写真プロジェクト『沖縄写真タイフーン〈北から南から〉』に連動して開催されたものだが、まさに静かな台風の目が、南から北へ届いたともいえよう。

特別作家賞は、1941年、旭川の旭川師範学校美術部の教師や教え子らが弾圧された「生活図画事件」で投獄された当事者、松本五郎氏と菱谷良一氏のところへと通い、彼らの日々の生活にレンズを向けた高橋健太郎氏が選ばれた。押収された絵画や本は戻らず、残っていたのはモノクロフィルムに記録された絵の写真のみだという。そうした過去と現在を、写真で紡いでいった展覧会「赤い帽子」は、事件はまだ終わっていないことの証でもある。

飛弾野数右衛門賞には、数十年にわたり、東京の人と風景を撮り続けてきた鬼海弘雄氏に決定した。浅草寺の同じ背景で撮影された市井の人々の肖像、東京を丹念に歩いて撮影された市井の人々の日々の営為が浮かび上がる風景は、東京もまた、まぎれもなくひとつの地域であることを照らし出す。地域の人・自然・文化などを撮り続けた仕事を対象とした同賞に、まことにふさわしい作品だろう。

海外作家賞は、楠本亜紀氏の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のロシアから、社会的・政治的状況などを風刺的に表現する『Proverbs』などを発表してきた、グレゴリー・マイオフィス氏が選ばれた。ヘッドセットを通してしか世界を見ることができない人々をテーマにした、最新作「Mixed Reality」シリーズに至るまで、フィクションと現実の間を、アイロニカルかつウィットに富んだまなざしで捉える表現が一貫している。

円卓を囲み、作品の評価から賞の性質まで、議論を尽くして決定していく密度の高い時間が、毎年の東川賞審査会の光景だ。もちろん、意見の食い違いもあり、結論が出るわけではない。しかし、このように毎年更新されていく、傾向なき傾向こそが東川賞の特徴であり、東川賞審査会らしい在りようだといえるだろう。1985年の「写真の町宣言」から、2014年の「写真文化首都」宣言を経て、前進し続けている東川町の人々の多大な努力と共感のエネルギーに導かれながら、東川賞もまた変化し続けている。

写真の町東川賞審査会委員 上野 修



第36回写真の町東川賞 <海外作家賞>

グレゴリ・マイオフィス (Gregori MAIOFIS)

ロシア・サンクト・ペテルブルク在住

photo by Ivan Sorokin

1970年、かつてのロシア帝国の首都であり、現在でも文化の中心地として栄えるレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）で、芸術家の家系に生まれる。幼少期から父親にドローイング、絵画、版画を学ぶ。1987-90年、サンクト・ペテルブルク州立アカデミー、レーピン・インスティテュートのグラフィックアート学部で学ぶ。1991年のソ連崩壊前に家族とともにロサンゼルスに移住。95年には故郷サンクト・ペテルブルクに戻って活動をはじめ。

当初は絵画、グラフィック・アート、ビデオ、写真など、多様な表現のあり方を模索するが、2000年代初頭から写真を主要なメディアとして用いる。最初の写真を用いたプロジェクト「Krylov's Fables (クルイロフの寓話)」(2000-02年)や「Tarot Decks (タロット・デッキ)」(2003年)では、寓意的なタイトルと内容によるコラージュや着色を施した作品を発表。現実を写した写真を素材に、油絵とエッチングに通じる技法を組み合わせたようなプロムオイルプリントに出会うことで、より自分の世界を具現化できる表現手段を手に入れる。

代表作に、投票する猿や、レーニンの書を読む熊などを題材とした、風刺的な内容をもつ「Proverbs (格言・ことわざ)」(2005-2015年)や、バレエダンサーとサーカスの熊をとらえた「The Taste for Russian Ballet (ロシアバレエ好み)」(2008年)など。2014年、これらのシリーズを収めた作品集『Proverbs』がアメリカのナツラエリ・プレスより出版される。最新作の「Mixed Reality (複合現実)」(2018-)では、現実を直視できない現代社会を生きる人間をユーモアを交えつつも痛烈に批判した作品を発表している。サンクト・ペテルブルクのAslan Chekhoyev Novy Museumにて個展を開催し、写真集『Mixed Reality』(2020年)を出版。国内外での展覧会多数。国際的にも注目を浴びている。

<作家の言葉>

ロシア人初の東川賞海外作家賞授賞を大変光栄に思います。また、日本に作品を紹介する機会を与えてくださった東川町に感謝いたします。

今回は長年の制作の中でも、ステイジド・フォトの要素も取り入れたシリーズ「Proverbs (格言・ことわざ)」「Taste for Russian Ballet (ロシアバレエ好み)」のなかから、最も注目を浴びてきた作品と、最新プロジェクトの「Mixed Reality (複合現実)」を展示します。登場人物がヘッドセットを身に付けた「Mixed Reality」シリーズは、2018年に開始し、今も継続中のプロジェクトです。東川町を訪れるこのまたとない機会を心待ちにするとともに、この新シリーズの展示が成功することを願っています。

グレゴリ・マイオフィス



Taste for Russian Ballet
from the series "Taste for Russian Ballet"
2008



Lenin's Science Makes One's Hands and Mind Stronger
from the series "Proverbs"
2006



God Makes the Back to the Burden
from the series "Proverbs"
2005



The Digital
from the series "Mixed Reality"
2019



A Retired Couple in Survival Mode
from the series "Mixed Reality"
2019



No Headset - No Reality
from the series "Mixed Reality"
2019



第36回写真の町東川賞 <国内作家賞>

ながしまゆりえ

長島 有里枝 (NAGASHIMA Yurie)

東京都在住

1973年東京生まれ。1993年、武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科在学中に、家族とヌードで撮影したセルフ・ポートレートで「アーバナート#2」パルコ賞を受賞。1990年代の「女の子写真」と呼ばれる潮流を先駆した写真家として注目を浴びる。ヌードや女性性を強調するメディアの評価と、自身のアートとしての実践との違和から渡米し、1999年、カリフォルニア芸術大学ファインアート科写真専攻修士課程修了。2001年、写真集『Pastime Paradise』(マドラ出版、2000年)で第26回木村伊兵衛写真賞受賞。2011年から武蔵大学人文科学研究科博士前期課程にてフェミニズムを学び、2015年同課程修了。2020年、修士論文をもとに、『「僕ら」の「女の子写真」から わたしたちのガーリーフォトへ』(大福書林)を出版。「女の子写真」に対する批判的検討と、世界的なフェミニズムやアートの潮流に通じるガーリーフォトとしての再評価を行った。

個展「そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」(東京都写真美術館、2017年)では、初期を代表するセルフ・ポートレートや家族のシリーズのほか、女性のライフコースに焦点を当てたインスタレーションを発表。「作家で、母で、つくる育てる 長島有里枝」(ちひろ美術館、2018年)では、自身の子の幼い頃の姿を撮影した写真のほか、「家庭」と紐付けて語られることの多かった女性にとっての創作行為を問うシリーズ「家庭について/about home」、第二次世界大戦中に日本の女性たちが行った「千人針」をテーマとした作品を展示。「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2019年)では、全盲の女性との対話から得たインスピレーションをもとに、写真、テキスト、記憶の問題を問いかけるような作品を発表した。家族や身近な人との関係性を手がかりに、社会や女性のあり方への違和感を掘り下げるような作品の制作を続けている。

<作家の言葉>

2016年から3年半、個展や二人展を立て続けに開催して得たものは大きかった一方、経済的に困窮し、生活者として追い詰められていく現実と向き合ってきました。作家を続けていくことが自己満足以上のなにかであってほしいと切に願いながら、経済的な自立が難しいせいで、自分と自分のやっていることには何の価値もない、という結論に至る日も少なくありません。そのようななか、東川賞受賞の報を受けていま、自分を信じて先に進んでいいよ、と背中を押されたような気持ちです。拙い活動を見てくださった方々に、心からお礼を申し上げます。

どのような言説が、なにを「芸術」とみなすのか。「価値」の有無を隔てる基準は、どのように生み出されるのか。写真を始めて30年、変わらず問い続けてきたのはそのことです。「女の子写真」への不信感が、わたしを社会構築主義と出会わせてくれました。「個人的なことは政治的なこと」という信念を胸に、これからも制作を辞めずに生きていきます。

長島有里枝



山、ルツェルン、スイス
Mountains, Luzern, Switzerland
2007



線路脇の花、東京
Flowers by the railroad, Tokyo
2000



Still life #4 (about home)
2015



Torn blankey (about home)
2015



Rice cake on fire
2015



Self-portrait
2015



第36回写真の町東川賞 <新人作家賞>

うえはらさやか
上原 沙也加 (UEHARA Sayaka)

沖縄県在住

1993年沖縄県豊見城市生まれ。2016年東京造形大学卒業。消費の対象として作り上げられた「沖縄」の記号的解釈による既存のイメージではなく、誰かの生活の延長線上にある地続きの場としての沖縄の日常の風景をとらえようとした卒業制作「白い季節」で、2015年度ZOKEI賞受賞。卒業後、沖縄に戻り撮影を続ける。

東松照明の活動を顕彰し、沖縄における写真の知識と教養の向上を図り、写真に関わる人材を育成する諸事業を積極的に展開する「一般社団法人フォトネシア沖縄」が主催する、沖縄の若手写真家の個性を発見、提示する試みであるプロジェクト「沖縄写真タイフーン<北から南から>」で選ばれ、東京・沖縄の二会場にて展覧会「The Others」を開催（キヤノンオープンギャラリー1、INTERFACE - Shomei Tomatsu Lab.、2019年）。2016年から2019年4月頃までの約3年にわたり撮影された、身近な風景の中で出会う、ふと誰かの時間に触れるような瞬間や、ごく小さな生活の場所にも横たわる島の歴史や問題の層を見つめる一連の写真を展示した。

白日の下に照らし出されたモノの細やかな肌理や表情に焦点を当てることで、沖縄の風景のなかに立ち現れる記憶や傷跡を丁寧にとらえながら作品の制作を続けている。

<作家の言葉>

この度は思いがけず新人作家賞を受賞することになり、大変うれしく思っています。

受賞の対象となった「The Others」は私にとって初めての個展で、様々な方にお力添えをいただき開催することができました。皆さまに、心より感謝申し上げます。

写真には、ただそこにあるものが思考の手がかりとして立ち現れます。

私はこれから先も、あらゆる細部の忘却に抗い、隔たりと共に想像し続けるための実践として、写真を探求していきたいと思っています。

この度選んで頂いたことは、今後も撮影を続けていく上での大きな励みとなりました。本当にありがとうございました。

上原沙也加



作品はすべて「The Others」より

from the series "The Others"

沖縄
Okinawa
2016-2019



第36回写真の町東川賞 <特別作家賞>

たかはしけんたろう
高橋 健太郎 (TAKAHASHI Kentaro)

東京都在住

1989年横浜市生まれ。2012年青山学院大学社会情報学部卒業。卒業後、スイスの写真家で当時日本に滞在していたアンドレアス・サイバートに写真を教わる。

2013年、日本の若い男性の服装と思想をテーマとしたプロジェクトを始める。2014年、古くから様々な作品のモチーフとされてきた多摩川を題材に、川沿いに暮らす人々の生活をとらえた作品「河床(かしょう)」で、コンシエンシャス・ポートフォリオ・コンペティション2014選出、および第9回リマインダーズ・フォトグラフィ・ストロングホールド・グラントを受賞。受賞後、レビュアーの一人であるフランスの新聞ル・モンドのフォトエディターからの依頼を受け、原爆投下70周年の広島を撮影、同紙に掲載される。

2017年から、北海道比布町に暮らす祖父母の元に通い、その日常を写した「Tomatoes, a bird, Takeko and Koichi」プロジェクトをはじめ。同年より、戦前の北海道で起こった「生活図画教育事件」取材するため、音更町在住の松本五郎(1920年生まれ)、旭川市在住の菱谷良一(1921年生まれ)のところへ通いはじめる。生活図画教育は、1932-40年に北海道旭川を中心に行われた、身の回りの生活をよく観察し絵に描くことを通じて、その変革をめざす美術教育。旭川師範学校の美術部員だった松本と菱谷は、生活の一場面を真摯に描いた絵により、治安維持法違反の罪に問われ検挙された。

2019年、二人の日常を写した写真による展覧会「赤い帽子」(ニコンサロン、銀座、大阪)を開催。2020年6月、写真集『A Red Hat』(赤々舎)を出版予定。

<作家の言葉>

この賞を受賞出来たのは全て、一世紀近くを今も元気よく生きておられる菱谷さんと松本さんが、彼らの人生の中に私を受け入れてくださったからこそ叶ったことです。素性のわからない「フリーランスの写真家」という怪しい肩書きにもかかわらず、図々しくも食事から寝泊まりまでご一緒させていただくことをお許しくださったお2人には感謝してもきれません。

『A Red Hat』の題材になっている生活図画事件は1941年に旭川師範学校で起こりましたが、あの時代と同じなのではと錯覚するほど不寛容な現在の世相に対し、自分の態度はどうあるべきか、と常に自問自答を繰り返しています。

その中でこのような機会をいただけたことは、まだ私の写真が「思考の契機」になる可能性を持つかもしれないと背中を押してもらった気持ちです。改めて、今まで自分と関わってくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。どうぞこれからもよろしくお願い致します。

高橋健太郎



1943年2月11日に菱谷さんが描いた『赤い帽の自画像』
旭川市、北海道
"Self-portrait in red hat" which was painted by Ryoichi Hishiya on February 11, 1943.
Asahikawa, Hokkaido
2017



北海道教育大学旭川校(元旭川師範学校)の敷地で休む菱谷さん
旭川市、北海道
Ryoichi Hishiya resting on the premises of Hokkaido University of Education(then Asahikawa Shihan Gakko school)
Asahikawa, Hokkaido
2018



旭川から音更に向かうバスの車窓から
北海道
View from the bus on the way to Otofuke from Asahikawa
Hokkaido
2020

作品はすべて「A Red Hat」シリーズより
from the series "A Red Hat"



松本さんの自宅アトリエにて
音更町、北海道
Goro Matsumoto's atelier
Otofuke, Hokkaido
2018



比布町、北海道
Pippu, Hokkaido
2018



ホテルの窓から
帯広市、北海道
View from the window in the hotel
Obihiro, Hokkaido
2020



PHOTO Akutagawa Jin

第36回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

きかいひろお
鬼海 弘雄 (KIKAI Hiroh)

神奈川県在住

1945年山形県寒河江市(旧醍醐村)生まれ。1963年山形県職員になる。退職後、法政大学文学部哲学科にて哲学者・福田定良の教えを受ける。トラック運転手、遠洋マグロ漁船乗組員、暗室マンなど様々な職業を経て写真家になる。

写真を通じて人間の存在の根源的なあり方を捉えようと、1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。1987年、『王たちの肖像 浅草寺境内』(矢立出版)で日本写真協会新人賞授賞、第13回伊奈信男賞受賞。その後も『や・ちまた 王たちの回廊』(みすず書房、1996年)、『PERSONA』(草思社、2003年、第23回土門拳賞、日本写真協会年度賞受賞)、『Asakusa Portraits』(Steidl、2008年)、『東京ポートレート』(クレヴィス、2011年)、『世間のひと』(筑摩書房、2014年)、『PERSONA最終章 2005-2018』(筑摩書房、2019年)など、半世紀近くにわたり浅草の町を舞台とした市井の人たちのポートレート写真を撮り続け、出版を重ねる。

1973年からの浅草での撮影と並行し、人の内面や価値観などを写し取る肖像写真のように風景写真を撮れないかと、人の姿をあえて写さず、町角や路地のモノだけから人の影や匂いを描写することにフォーカスした「空間のポートレート」の試みをはじめ。夢と現のあいだを漂い歩きつつ、人が暮らす場としての街の肖像を撮影した写真集として、『東京迷路』(小学館、1999年)、『東京夢譚—labyrinthos』(草思社、2007年)を出版している。

日本での撮影と並行し、1979年にはじめて訪れたインドや、トルコのアナトリアにも旅を重ね、人々の営みや眼差しのなかに、消費至上社会で失われた人間本来の感触を探るような撮影も行う。反復的に同じ場所に通い、人の営為を見つめるなかで、人間とは何かを問いかけるような写真の発表を続けている。

<作家の言葉>

本年度の東川賞飛弾野数右衛門を受賞させて頂きありがとうございました。

農村育ちの私にとって、自然を相手の仕事を多くしている町の賞を頂けるのは光栄です。

受賞を機に、もう少し写真の山を登れたらと思っています。

この度はありがとうございました。

鬼海弘雄



銀ヤンマに似た娘

A girl who was like a dragonfly
2011



大工の棟梁

A chief carpenter
1985



カラスと暮す男

A man living with a crow
1995



品川区北品川

Kitashinagawa, Shinagawa-ku
1986



義足の老人

An old man with an artificial leg
1974



台東区浅草

Asakusa, Taito-ku
1985

第36回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2020～

<受賞作家作品展>

会期：8月1日（土）～9月2日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：00（8月1日は15：00～21：00、9月2日は15：00まで）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月1日、2日は無料開放）

海外作家賞……………グレゴリ・マイオフィス

国内作家賞……………長島有里枝

新人作家賞……………上原沙也加

特別作家賞……………高橋健太郎

飛弾野数右衛門賞……鬼海弘雄

●8月1日（土）

13：30～14：30 授賞式（東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション「受賞を祝う集い」

（東川町農村環境改善センター・大ホール）

●8月2日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査委員、ゲスト

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」（通称：写真甲子園）では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適度な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、事業が変更・中止・延期となる可能性がございます。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞〈海外作家賞〉	1名	賞金100万円
写真の町東川賞〈国内作家賞〉	1名	賞金100万円
写真の町東川賞〈新人作家賞〉	1名	賞金50万円
写真の町東川賞〈特別作家賞〉	1名	賞金50万円
写真の町東川賞〈飛弾野数右衛門賞〉	1名	賞金50万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する〔写真の町東川賞審査会〕において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、〔写真の町・東川町文化ギャラリー〕に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的的發展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



フォトフェスタHP

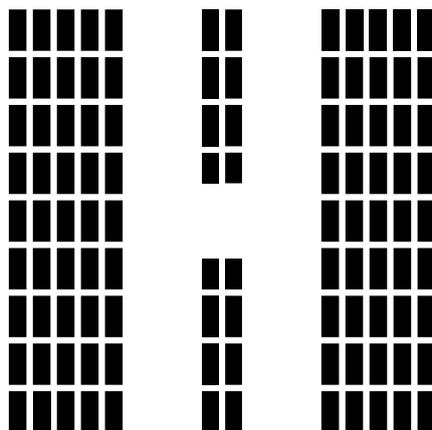
東川町 HP <https://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

フォトフェスタ HP <https://photo-town.jp/>

 https://twitter.com/Higashikawa_PF

 <https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/>

 https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー内
写真の町課（担当：矢ノ目・吉里）
TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704
E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp
<https://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限りません。